

コラム22:叔母との別れ

3月の終わり、桜の見頃の頃、私の叔母一母の2歳年下の妹に当たる人が、この世を去りました。享年83歳、昨年の年末に家に伺った時は、元気そうで、いつもと変わらない笑顔で迎えてくれました。今年の2月に体の不調を感じ、病院で検査を受けた時は、すでに手遅れの状態であったようです。末期の膵臓がんでした。それから1か月あまり、体は急激に衰弱し、静かに息をひきとられました。元気な人であっただけに、突如として逝かれた、という感があります。



子供がなく、夫婦二人だけの生活でしたが、私も私の子供たちも、かわいがってもらいました。大竹市に住んでおられたので、「玖波のおばちゃん」「玖波のおじちゃん」と呼んでおりました。夏場には、叔父の好きな海釣りに連れて行ってもらい、親子で楽しませてもらった、懐かしい思い出があります。写真は、21年前の夏、子供たちが小さい頃に、訪ねた時のものです。叔母は非常に温厚な気質の人で、家を訪ねると、「よう来たね」と言って、いつも眼鏡の奥に「おだやかな笑顔」をたえて、迎えてくれたものです。



私はよく知らなかったのですが、叔母は「俳句の会」で40年もやっていたようで、人に教える域に達していたようです。会の仲間の人たちと、全国を旅をして、ともに俳句をつくり、話し合うのが叔母の生きがいのひとつなのでしょう。夫婦とも子供好きでしたが、自分たちの子供には恵まれませんでした。しかし、釣り好きで、世話好きで、温厚な人柄の夫を「つれあい」として、十分に自分の人生を楽しんだ人だと思います。葬儀の時の遺影の側に俳句が添えられていました。叔母が一番気に入っている句とのことでした。

水の面に 鉄橋ゆらぎ フキノトウ

葬儀を終え、火葬と初七日を終えたあとで、近親者だけの食事会が催されました。これはこの辺りの「ならわし」のようです。暗く悲しいというのではなく、明るく和やかな雰囲気会の会となりました。人生を十分に生きた人の葬儀というのは、そういうものなのでしょう。「俳句の会」の会員の方から、亡き叔母にあてた句が次々と披露されました。ちょうど桜が見ごろでしたので、それを季語にした句が多かったようでした。私も向う見ずにも、一句披露してしまいました。

桜咲き やさしき笑顔の 叔母が逝く

帰宅して妻に私の句を言うと、「稚拙な句じゃね」と評して、負けじと一句。

満開の 桜土産に 叔母が逝く

ここでの土産(みやげ)というのは、二つの意味があり、一つは、この世を去るにあたって、叔母が冥途の土産にもっていった、と言うこと。今一つは、叔母がこの世に残った私たちに向けての、「置き土産としての満開の桜」という意味がある、とのこと。さすが「国文科」、私の完敗のようです。俳句と言うのは、自分の感情を、直接的に言葉で表現するのではなく、写真のスナップのような情景描写の中から、自分の心情を想像させていくもののようです。そう考えると、確かに私の句は稚拙の領域かもしれません。

長年連れ添った「つれあい」を失うことは、男にとっても、女にとっても、非常に辛く、「受け入れがたい現実」というものでしょう。一人残された叔父の心情を想い、私は性懲りもなく、さらに一句。

きれいだね 呼べど答えぬ 桜花

今までともに人生を連れ添い、声をかければ、答えてくれるのが当たり前のことであったであつたのに、決して返事が返ってこないということ。「今年の桜はきれいじゃね」と言っても、「ほうじゃねえ」と答えてくれることはないということが、夫婦の永遠の別れということなのでしょう。叔父の寂しさは、想像するに余りありますが、私自身のこれからの人生にとっても、誰の人生にとっても、他人事ではない将来の現実です。ちなみに、叔母がこの世を去ったのは、昨年亡くなった私の父の命日の当日、3月28日でした。そして死亡時間も、わずか15分違いの、夕刻6時18分とのことでした。



あれから1か月余り、桜は散り、カナメが真っ赤に色づき、花水木がピンク色の花を付け、今は庭のツツジが花盛りとなっています。このような春の風景を、父も義父も叔母も見ることにはできない。しかし、時は絶えることなく流れて、人を取り巻く自然は変わることなく移ろいで行く……人の人生と人の死、というのはそういうものなのでしょう。

「わしも、いつかの世から消えにゃあいけんのじゃが、酒でも飲んで、賑やかに送ってもらえるような人生にしたいもんよ」

(’13・5・1)